鳥取県
東伯農業改良普及所

長芋産地の振興に向けて

活動期間：令和元年～（継続中）

〇JA鳥取中央長芋生産部（100名、35ha）は長芋と県育種の「ねばりっこ」を生産しており、「ねばりっこ」への転換を進めることで産地振興を図っている。
〇平成30年産より「ねばりっこ」の腐敗（出荷後の腐敗、栽培中の腐敗）が問題化したため、「ねばりっこ腐敗対策プロジェクト（PT）」で対策を支援、集荷場改修・運営マニュアル作成を行った。
〇腐敗対策の検討を通じて「今後の長芋産地をどうしていくか」をテーマに、生産部・JA・町・県で長芋産地振興戦略会議を定期的に開催し、産地振興計画の策定、県事業を活用して問題解決を実施することになった。

具体的な成果

1. 出荷後の腐敗クレームが激減

■PTでの検討結果を基に腐敗対策を盛り込んだ集荷場改修により、令和4年3月時点で市場からのクレームは0件となっている。

2. 栽培中の腐敗対策にむけた体制を構築

■これまであいまいであった産地全体の腐敗の発生状況と、腐敗の多い生産者を把握できる体制が整い、生産部指導部会の重点取組事項として取り組みが始まった。

3. 新規栽培者の早期技術習得

■生産部でもその必要性が認識されたため、指導部の取り組みとして行うことになった。

4. 産地振興計画の策定

■長芋産地振興戦略会議が定期的に開催され、取組内容と必要な事業を整理し、県事業の実施に向かっている。

産地振興計画

普及指導員の活動

令和元年

■腐敗対策PTにおける関係機関の役割分担を整理し、検討会を開催した。
■調査研究を実施し、対策の助言を行った。

令和2年

■PTでの検討結果を基に、集荷場の改修に向けた助言、運営マニュアルの作成を支援した。

令和3年

■産地振興にむけた意見交換を設定し、今後の産地が向かうべき方向性を整理した。

■収穫用バックホーの導入にむけ、実態調査・導入の下限面積の整理を行った。
■新規栽培者向け勉強会を開催した。

普及指導員だからできたこと

・日頃から生産部・JA・研究機関と連携しているため、各機関を適切にコーディネートし、迅速に腐敗の対策を検討・実施することができ、また産地振興にむけた協議を行うことができた。

鳥取県

長芋産地の振興にむけて

活動期間：令和元年～令和３年度（継続中）

1. 取組の背景

（１）長芋産地の背景

JA 鳥取中央長芋生産部（以下、生産部）では、従来の長芋と、県園芸試験場が開発した新品種「ねばりっこ」を栽培している（図 1）。長芋よりも収量・単価ともに有利な「ねばりっこ」への転換を進めることで産地振興が図られる中、「ねばりっこ」の選果に適した集荷場への更新にむけた検討が平成 30 年より始まった。

（２）長芋産地の課題

平成 30 年産から「ねばりっこ」の市場出荷後の腐敗（写真 1，2）と栽培中の腐敗（写真 3）が問題化し、販売単価下落による生産意欲の低下により、栽培面積が減少に転じたため、腐敗対策が急務となった。また腐敗対策を検討する中、産地振興にむけては反収向上や新規栽培者の技術習得、収穫労力の軽減など新たな課題が浮かびあがり、改めて「今後の長芋産地（在来長芋を含む）をどうしていくか」をテーマとして、長芋産地の振興にむけた戦略を立てることが必要となった。

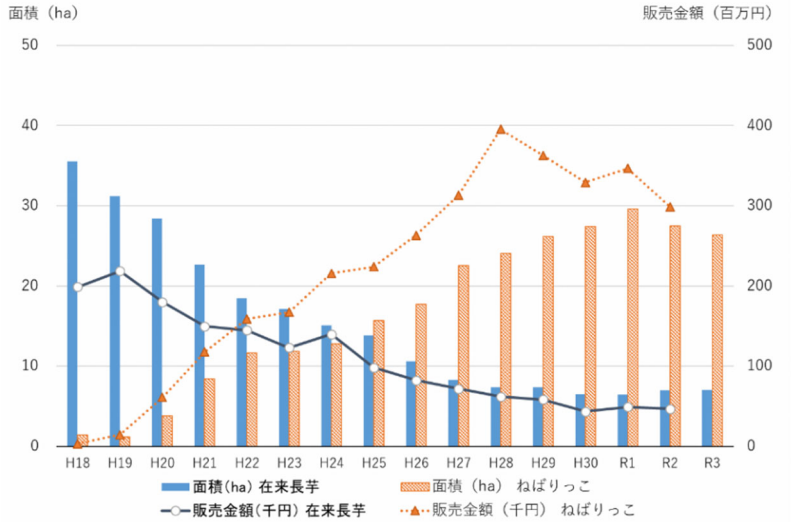

図１　面積と販売金額の推移

写真１、２　市場出荷後の腐敗

写真３　栽培中の腐敗

2. 普及活動の内容

（１）「ねばりっこ」の腐敗対策

ア　ねばりっこ腐敗対策プロジェクトの発足と活動

腐敗の多発を受け、JA の呼びかけで「ねばりっこ腐敗対策プロジェクト」が令和元年８月に発足した。普及所は集荷場チーム、栽培チームに参画した（図 2）。

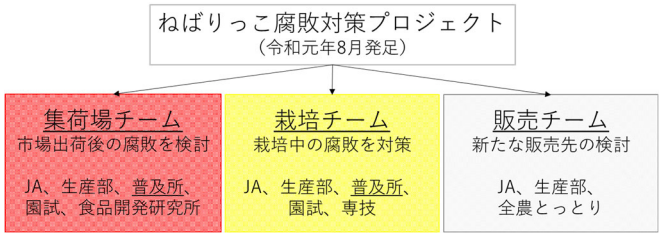

図２　プロジェクトの組織図

イ　市場出荷後の腐敗対策（集荷場チームの活動）

市場出荷後の腐敗の原因を検討し、新集荷場における腐敗対策の確立を目標とする集荷場チームは、関係機関との連携が重要であった。そこで普及所がコーディネーターとして関係機関に働きかけて役割分担を整理し、調査研究の実施、各関係機関が行った調査の検討会開催、腐敗対策を取り入れた新集荷場への助言、および運営マニュアルの作成支援を行った。

ウ　栽培中の腐敗対策（栽培チームの活動）

栽培中の腐敗の原因を検討し、対策の確立を目標とする栽培チームでは、混在する複数の腐敗症状の整理と腐敗発生の集計体制構築、現地ほ場での対策試験の実施、チームでの検討結果の生産者へのフィードバックを行った。また腐敗が多く低収量となっている生産者に対し、JA・生産部と連携して個別検討会を行い、腐敗の低減にむけた支援を行った。

（２）長芋産地振興計画の作成

ア　産地振興にむけた具体的方策の検討

今後の長芋産地の振興にむけて、生産部役員・JA・町・県の意見交換を設定した。また、幅広く意見を収集するため若手生産者および歴代生産部長経験者へ産地振興について聞き取りを行い、課題と今後産地が向かうべき方向性を整理し、協議を重ねた。

イ　新規栽培者への勉強会

毎年１～２名が「ねばりっこ」の栽培を新規で始めており、新規栽培者の技術習得が急務であった。そこで新規栽培者への勉強会を開催することとし、併せて腐敗が多く低収量となっている生産者へも声をかけた。勉強会は生産部と連携し、若手生産部員のほ場で現地勉強会とするなど、生産部の活動として新規栽培者を育てていく気運が高まるよう働きかけた。

ウ　バックホー収穫の効率調査と導入にむけての整理

現行の収穫機であるトレンチャーは製造休止となっており、安全面からも産地ではバックホーを利用する生産者が増えてきた。今後の導入に向けて、作業体系別の作業効率と安全性について、バックホー収穫を行っている全８戸の実態を農業労働担当普及員と連携して調査し、導入の下限面積を整理した。

3. 普及活動の成果

（１）「ねばりっこ」の腐敗対策

ア　市場出荷後の腐敗対策

集荷場チームでの検討結果を基に、腐敗対策を盛り込んだ集荷場の改修、冷蔵庫の新設が令和２年度産地生産基盤パワーアップ事業を活用して行われた。新集荷場稼働以来、令和４年３月時点での腐敗に関するクレームは０件となっている。

イ　栽培中の腐敗対策

栽培チームの働きかけにより産地全体の腐敗の発生状況と腐敗の多い生産者を把握できる体制が構築された。栽培チームの活動は生産部の重点取組事項として位置づけられ、ひきつづき発生ほ場のマップ化など腐敗対策の検討を行っている。

（２）産地振興計画の作成

北栄町が事務局となり長芋産地振興戦略会議が定期的に開催される体制となり、産地維持・発展には、「ねばりっこ」の腐敗対策が最優先であるとともに、新規栽培者の確保と技術習得、収穫労力軽減のためのバックホーの導入、消費拡大・ブランド力向上などが産地維持・発展に必要であることが確認された。そこで、取り組みに必要な事業の整理と、産地振興計画「NEXT 砂丘ながいも・ねばりっこ次世代産地創造プラン」を策定し、令和 5 年度の実施に向けて進んでいる。

（３）新規栽培者の技術向上

新規栽培者への勉強会は令和 3 年度は普及所が企画して開催していたが、生産部でもその必要性が認識されたため、令和 4 年度からは生産部の取り組みとして行うことになった。

4. 農家等からの評価・コメント

積極的に現地に足を運んでくれ、産地の思いを組んだ計画を作成してもらい、担当としてできることをしっかりしてくれた。各機関と引き続き連携して、腐敗対策の確立にがんばってほしい。（生産部役員）

5. 普及指導員のコメント

集荷場の改修・腐敗対策ともに喫緊の課題であったため、最優先の活動として取り組んだ。またこれを契機に生産部自身が産地の将来像を見据えることにつながり、新規栽培者の技術習得のサポートなど新たな取り組みが出来た。関係機関一丸となって課題解決へ向かうことができ、私自身の普及指導員として活動の幅を広げることができた。

6. 現状・今後の展開等

（１）栽培中の腐敗の原因究明と対策確立

腐敗が多い生産者のほ場を対象に、産地振興計画を通じて対策を確立する。

（２）生産部全体の栽培技術の底上げ

継続した勉強会の開催により新規栽培者を含め生産部全体の栽培技術の底上げを図る。

（３）産地振興に向けた取り組み支援

産地振興戦略会議に継続して参画し、情報提供およびデータ収集を行う。

（東伯農業改良普及所　改良普及員　川田久美子）